
怪奇！イルミネーションの恐怖！！！

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪奇！イルミネーションの恐怖！！！！

【Zコード】

Z3530P

【作者名】

ぬじゅわきし

【あらすじ】

イルミネーションは実は、人を襲うヤドリギの「」とき寄生生物だった！！！！迫り来る電飾の恐怖！果たして、主人公の運命はいかに！

時はクリスマスの夕方。達志と菜穂子は一人で公園のベンチに座っていた。菜穂子は言った。

「ねえねえ、達志に、クリスマスプレゼントあるんだあ。」

「なんだい？」

「見たい？」

「そりや見たいさ。」

「ひみつ～ほつとした顔」

「なんだよひみつってえ」

「怒んないの達志。だから、見せてあげる。はい、これ。」

「…なんだいこれ？」

それはネックレスであつた。大きめのちょっと鋭利なハートの飾りが付いている。

「幸運のネックレスだつて。これをつけとけば安心だとか。」

「洒落てるねえ。」

「着けて。」

「うん。」

達志はハートのネックレスを着けた。

「わああ似合つ！」

「そう？ありがとう！じゃあ僕からもプレゼント。」

「なになに？」

達志は目の前の枯れた大木を指差して言った。

「あの木、実はイルミネーションがかなり飾られてるんだ。もうすぐ夜になると、すつごい綺麗に光るんだつて。」

「そーなのー！？！？すつごいたのしみーー！」

二人は木をじつと見つめていた。

「6時頃かな。つぐの。」

「あと1分だね。」

「うん」

しばらく二人は待っていた。

やがてわつ、と大木が煌めきだした。

「わああああつ！」

「綺麗だね。」

枝という枝にイルミネーションがびっしりとついており、鮮やかに周りを照らし出していた。

ほんと
綺麗だね

ひたりまし

ふたりはしみしみとそのイルミネーションを眺めていた
福なひと時。
なんと幸

だが

すぐ近くで悲鳴が起きた。大木の裏だ。

「可？」

「何だろう…見てみる？」

一嫌よ、この前のムツケとか首人間とかみたいな事にならないでよ。

「アーティストの才能を発揮するためには、アーティスト自身がアーティストであることを認めなければなりません。」

達志がベンチから立ち上がり、菜穂子も仕方なくついていき、悲鳴

の元、大木の裏に向かつた。

それは異様な光景であった。人がイルミネーションに絡まれて悲鳴を上げていたのだ。

「助けて助けて助けてくれえ！」

菜穂子も叫んだ。

「どういう事！？？」

「わからん！」

達志は訳がわからなかつたが、とりあえずイルミネーションに絡まれた人の手をつかんで強く引いた。妙に絡まれただけにしては、ほどきにくいなと違和感を抱きつつ、なんとかその人を助け出した。

「あ、ありがと… イテテテ…」

その人は腕を押されて呻きだした。達志はその腕を見た。何か黒いものが刺さっている。達志は引き抜いてみた。それは割れていたが明らかにイルミネーションの電球だ… 達志は言つた。

「これは…？」

その時に、人に異変が起きた。「ぐう、ぐう」と呻きもがきだした。菜穂子は言った。

「大丈夫なの… 救急車呼ばなきや。」

「わからない… ん？ わあああ！」

達志は悲鳴を上げた。その人の身体から黒い長い触手が生えてきた。そして触手の節々が煌めきました。

「イ… イルミネーションだ！！」

イルミネーションは横たわったその人の全身に絡み付き人型に光り続けていた。

「どういう事なの…」

「…」やつは生き物なのか…。」

その時、じやぢやぢぞと何かが崩れる音がした。振り返ると大木がなんと砂のように崩れ始めたのだ。後は巨大なイルミネーションの塊がそこにあるだけだ。

「きやあ！」

気がつけばイルミネーションに絡まれた人は白骨化していた。

「なにこれ！」

「わかつた…こいつはイルミネーションに化けた寄生生物だ…ヤドリギみたいだな…宿主が養分を吸いとられたんだな…あの光る電球は、おそらく卵なんだ…やばい、逃げろ！」

大木にあつた大量のイルミネーションが蠢き暴れだし、それを見て二人は逃げ出した。極彩色の発光体は彼らを嗅ぎ付け、鮮やかに照らしながら追いかけてくる。その非現実的な、ともすれば神秘的な恍惚すら感じてしまう状況に二人は悲鳴を上げながら走り続けていた。『ゴジゴジ』とイルミネーションは周りの木をいとも簡単になぎ倒しながら追いかける。

「どうすんのよー」

「分からぬー！とりあえず逃げろ！」

「そんな…あ、タクシーがあるわ！」

「どこだー！？」

「あそこー！」

「ほんとだ！」

「どうしたんだい？」

「二人が急いでタクシーに入つたので運転手は驚いて、

と言つた直後にタクシーの窓という窓が、イルミネーションのついた黒い触手に覆われた。運転手は喚いた。

「わあああなんだこれは！眩しい！くわああー…」

「いいからぶっぱなせ！運転手！…」

「ふあいい…」

泣きながら運転手はアクセルを踏み、イルミネーションからすり抜けて逃れた。イルミネーションは地面でのた打ち回っていた。だが、「なんだあれは？」

「イルミネーションに見えるが…」と見物人が来た。突如、イルミネーションは触手を伸ばし、見物人達の頭頂部に次々と差し込んだ。

夜の街をタクシーは行く。街はクリスマスで沸いてるが今やどの電飾も一人には恐怖でたまらなかつた。どこまで走れば良いのだろう…もう良いのだろうか…

運転手は言った。

「お若いの、お金は半額でいいからもう降りてくだせえ…ぼかあもう疲れました。」

「なるべく遠く離れたいのだ。」

「そんなあ…」

その時、突然タクシーの真横に人が走ってきた。全身がイルミネーションに侵されている。菜穂子は叫んだ。

「なにこれ！？」

「分からん！だが絶対…」彼らの目は焦点が定まつてないが明らかに達志と菜穂子を狙っている。それにしてもタクシーと並んで走るとか随分な運動能力だ。達志は運転手に叫んだ。

「飛ばせ！」

だが運転手は突然ブレーキを踏んだ。車は減速した。

「何をしてる！」

「もう限界だ！わしゃ逃げる！」

運転手はタクシーから逃げ出した。だが…

「わああああ何をするやめるおごげげぐげ」

運転手は、発光人間に取り囮まれ、次々と種を植え付けられてしまつた。彼らが去ると哀れ運転手はイルミネーションと化してしまつた。

達志はタクシーから出た。周囲にはイルミネーションに取りつかれた人々、イルミネーターがたくさんいる。達志は関節をぽきぽきと鳴らした。ふふふ、ついにこれを發揮する機会があつたか。達志がいつも家でやつていた妄想格闘技訓練、今こそ、人に使うべし！ イルミネーターが次々と襲い掛かってきたが、達志は巧みなカンフーでなぎ倒した。だが、いくら倒れてもまた起き上がって襲いかかる。いつたいどういうことだ。

背後から、イルミネーターがやつてくる。達志は脳天にチョップをした。イルミネーターは突然意識を失つて、起き上がらなくなつた。あれ・・・

その後も脳天を攻撃すると皆次々と倒れた。どういうことだ？ と、達志は思ったが、しばらく戦つて判明した。どの人も脳天にイルミネーションの電球があつたのだ。それを割つたらどうやら効果がなくなるらしい。どういうことだ・・・。

全員が倒れたとき、達志は分かつた。これは旧式のイルミネーションなのだ。バイメタルの入つた、イルミネーションの点灯を制御する電球。これが切れると全ての電球が点かなくなる。そうだ。あの電球の中にもバイメタルに相当する、いわば「心臓部」があるのだ。それがあの怪物の弱点だ。

騒音が聞こえた。見れば、道路を横断して、イルミネーションの大群が襲つてくる。タクシー内の菜穂子は悲鳴を上げた。UFOのごとく、色とりどりの光を発しながら乱雑に迫つてくる。だが、達志は慌てない。そうだ。心臓部に向けて・・・。黒い触手はもう寸前まで迫つていた。達志はジャンプした。殺氣。達志はイルミネー

ションの視線を感じた。

そこだ！

達志はある電球にとび蹴りした。

イルミネーションは声を上げ、そして力を失った。輝きも失せ、へなへなとただの黒い回線と成り果てた。

その後、二人は、達志のマンションの部屋で共にいた。周りを見ればなるほど、妄想格闘技の練習用にマネキンが置いてある。天井になにやら黒い配線が絡まつてゐるのを不思議に思いながら、菜穂子は言った。

「はああああ、怖かつた。」

「やっぱり、クリスマスは家で祝うのが一番だね。」

え! じゃあ少しだけ! 「

「電気消せり。」

菜穂子は部屋の電気を消した。

突然、部屋が極彩色に照らされた。なぜ。二人は目を見開いて見つめ合つた。そして、天井を見上げた。

「イルミネーション！」

「わああ！」

どたん、ばたん、しゅつ、「ぎえええええ……」どた・・・ばた・・・・。

電気は点いた。

「危なかつたね。」

「うん。」

二人は無事であつた。床の上にはイルミネーションの屍が広がつていた。

「これのおかげで助かつたよ。」

達志は屍に埋もれていたハートのネックレスを出した。ネックレスは確実に、イルミネーションの心臓部を射抜いていた。それは・・・

「私のクリスマスプレゼント・・・。」

「・・・」

「ほんとに、幸運を呼んだのね。」

「うん。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530p/>

怪奇！イルミネーションの恐怖！！！！

2010年12月7日08時15分発行